Osaka University Knowledge Archive

Title	Wordsworthian Ecopoetics : Narrating the Encounter with Nature
Author(s)	佐々木, 郁子
Citation	大阪大学, 2011, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59127
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【10】

氏　　名	佐々木　郁　子（さささき　いくこ）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学　位　記　番　号	第　２４８７７　号
学 位 授 与 年 月 日	平成 23 年 9 月 20 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第４条第１項該当 言語社会研究科言語社会専攻
学　位　論　文　名	Wordsworthian Ecopoetics : Narrating the Encounter with Nature
論 文 審 査 委 員	（主査） 言語文化研究科教授　渡邉　克昭 （副査） 言語文化研究科教授　貴志　雅之 世界言語研究センター准教授　畑田　美緒 言語文化研究科准教授　中村　未樹 世界言語研究センター教　授　高橋　　明

論 文 内 容 の 要 旨

Jonathan Bateの*Romantic Ecology: Wordsworth and the Environmental Tradition*（1991）以降、イギリス・ロマン派詩人William Wordsworth（1770-1850）の作品は、エコロジーの観点から、さらにいえば1990年代初頭に深刻な環境危機を受けて誕生したエコクリティシズムの観点から再評価されるようになってきた。[1]ワーズワスを「自然詩人」として読む行為が、文学研究の枠を越えて、我々の環境に対する姿勢を見直す上でも重要な意味を持つようになったのである。

ワーズワス作品は、都市・産業化がもたらす環境問題のみならず、自然の喪失や疎外といった精神的問題にも目を向けている。本論は、ワーズワスの環境意識を作品分析を通して探ることを目的としている。以下ではまず、*Romantic Ecology*におけるワーズワス論の問題点にふれた上で、自然観の複雑さに注目することの重要性を示したい。

*Romantic Ecology*は、ロマン派をエコロジーの観点から論じた本格的な書だが、そのワーズワス論には一つの問題点が窺える。それは、自然観の汎神論的側面しか扱っていないことである。これは、自然と人間との間に生命のつながりを見出すワーズワスの自然観と、現代のディープ・エコロジーとの類似性を示し、彼をエコ・コンシャスな詩人として再評価するためであったと思われる。だが実際のところ、その自然観は、Karl KroeberやOnno Oerlemansが指摘するように、自然を人間とつながった対象としてだけではなく、自然をありのままに、その物質性や他者性を捉えようとする視点をも含む極めてアンビヴァレントなものである。[2]オーレマンズは、後者の態度を「マテリアル・サブライム」と呼ぶ。これは、自然の他者化と、それとのつながりを回復したいという切望とが入り混じった、複雑な知覚である。[3]ワーズワスの自然観は、今やエコロジカルなものとして定着しつつあるが、それをより詳細に検討し直した際にも同様のことがいえるのか。本論は、自然観のアンビヴァレンスに焦点を当てることにより、ベイトからオーレマンズに至るエコクリティシズムを用いたワーズワス研究の深化を図る。以下の各章を通して、詩人の環境意識は、ディープ・エコロジーに回収されえない、より複雑なものとして浮かび上がることになるだろう。

エコクリティシズム研究の近年における多様化を考慮して、本論が用いる方法論をはじめに示しておきたい。第1章では、ベイトの*Romantic Ecology*と*The Song of the Earth*（2000）をとりあげ、ワーズワス作品の政治性に対する姿勢の違いを指摘し、本論がそれをどう扱うかについて説明する。[4]ベイトは、詩人の緑の政治学を歴史的に探る前作とは異なり、*The Song of the Earth*では、Martin Heideggerの後期存在論哲学「住まう」に依拠した「環境詩学」の観点から作品を読み直している。[5]環境保護を訴える道具として言語を用いる「環境政策」とは異なり、環境詩学は言語や事物を道具とみなさない、「住まう」という他者への配慮を伴う存在様式を提示するものとされる。[6]だが実際には、環境詩学と環境政策との境界は極めて曖昧であり、ベイト自身もそれを「緑の読解のディレンマ」として問題視している。[7]例えば、ハイデガーと環境政策を推進したナチス・ドイツとの結びつき、またワーズワスと緑の政治学の関係から、それぞれのテクストが政治性を孕んでいる可能性は否めない。

非政治的な環境詩学やエコクリティシズムが、テクストの孕む政治性をどう扱うべきか。本論では、エコクリティシズムを、文学研究を通じて環境を思考の中心に据える努力を続けていく思索的実践とみなし、その上でテクストの政治性に接することにしたい。すなわち、ワーズワスの作品分析を通して、我々人間が近代初頭から自然環境にどう関わってきたか、また今後どう関わるべきかを考える。作品を近代初頭の産物として、同時に我々の環境意識にまで影響を与えうるテクストとして位置付ける読みを展開したい。

第2、3章では、自然の他者化のコンテクスト、すなわち近代諸科学の影響と、動植物を下位の存在と見る前近代的自然観の影響をふまえて、ワーズワスの環境意識を考える。まず第2章では、*A Guide through the District of the Lakes*（1835）をとりあげ、地質学と詩人の環境意識との関わりを検証する。

*A Guide*第1、2部にかけて、湖水地方の歴史が人間の移住前から地質学的知見を交えて語られ、動物が先住民とみなされていることから、ワーズワスが地質学に基づいた非人間中心主義的な歴史観を持っていたことがわかる。このような歴史観や詳細な地質学的描写は、それまでの案内書には見られない特徴である。また、地形は膨大な時間をかけて緩やかに形成されるという認識や、原初の自然への強い関心も随所に読み取れる。ロマン主義の時代は、地質学が一科学として発展した時期にあたり、地層や化石の調査から、地球の原始状態や年代などを解明する作業が盛んに行われていた。その過程で、「地質学的時間」が発見される。この新たな時間性を、ワーズワスが受容していたのは明らかである。ハイデガーの*Being and Time* (1927)における時間性に基づいた存在論と環境倫理との関連を指摘するRobert Frodemanによると、このような地質学的時間を認識することは、人間中心主義的な時間感覚からの脱却を促し、地球規模での思考をもたらすという。[8]

ワーズワスの地質学的時間の感覚は、上記存在論を参照することにより、*A Guide*第3部のコミュニティ保存論に見られる環境意識と接続される。ハイデガーが説く時間性に基づいた本来の存在様式は、環境詩学が依拠する後期哲学「住まう」にもつながるものであり、そのコミュニティ論もワーズワスの論と類似している。だが後者は、地球規模での時間性や、コミュニティに動植物を含める点で、環境中心主義的であることから、本論では*A Guide*を環境倫理のテクストとして位置づける。

第3章では、*The White Doe of Rylstone; or The Fate of the Nortons*（1815）に見られるワーズワスの動

物観について考える。白鹿の表象には、動物と人間との間に類似性を見る態度と、動物を他者とみなす態度とが入り混じった複雑な動物観がよく表れている。前者は、当時盛んであった動物愛護運動の、人間と同様に感情を持つ動物を同情の対象とする態度を想起させる。白鹿を飼い主エミリーと同等に描き、精神性の高さを強調するレトリックは、人間と動物との間の境界を曖昧にする。後者は、白鹿を沈黙した、劣った存在とする表現が「存在の大いなる連鎖」のヒエラルキーを連想させるが、それらは白鹿を不可知の他者としても位置づける。そのような他者について語ることの難しさ、また語る際には謙虚さが求められることが、土地の人々の白鹿に対する誤解や、"Hart-Leap Well"（1800）の羊飼いの謙虚な語りから読み取れる。

動物の他者性をエコクリティシズムの観点から考える際に、ハイデガーの動物論は有益な視点を提供してくれる。世界に関する哲学的考察のなかで、彼は動物と人間との間に「ヒエラルキーに基づいた評価」ではなく「比較考察」から導かれた差異を提示する。[9]人間のように言語化、歴史化された世界を持たないという動物の他者性は、声を持つ人間が果たすべき倫理的責任を暗示しており、「住まう」という存在様式を求めるものとされる。これをふまえると、ワーズワスの動物の他者化や羊飼いの語りの特徴は、声を持たない動物を語る際の責任を詩作において実践した例として読み直される。これは動物愛護のみならず、「住まう」という経験を提示する環境詩学にも通じるだろう。

以上から、ワーズワスの動物表象や語りには、存在の連鎖における個々の存在者に対する敬意の影響が読み取れる。動物の他者化はもちろん、動物に人間との類似性を見る態度もまた、動物を人間同様に独立した存在者とみなすものであり、この二つの態度がつながりあうところに、倫理的にエコロジカルな動物観が見えてくる。

第4、5章では、自然の他者化の表象に焦点を当てる。第4章では、"The Ruined Cottage"（1799）における自然の他者化の表象や語りの様式を分析する。その際、イェール学派Geoffrey H. Hartmanの論を参照したい。[10]初期エコクリティシズムは、新歴史主義批評家やイェール学派のテクスト分析を自然を抑圧するものとして批判した。しかし、作品の自然を歴史を覆い隠すベールとして読む前者に対して、ハートマンは他なる自然の存在に迫る議論を展開している。そのような自然は、行商人が廃墟を覆う草を見て悲しみから癒される体験を語る箇所と、マーガレットの死を語る箇所に見受けられる。前者は、自然の様相と人間の精神状態を対比させて、精神の影響を受けない自然の存在を示唆している。後者は、死や死体についての語りを通して、通常は抑圧されている人間の自然としての側面を露呈する。

だが、自然を語ることは、言語を通して自然を内面化することでもある。自然を他者として語ることは可能なのか。例えば、行商人が草を見て癒される体験を語る際、草は静寂を表す言葉によって形容されている。ここで自然は、行商人の感情の象徴ではなく、沈黙した存在として語られる。自然の沈黙は、人間のみが声を持つという人間中心主義的発想ともなりうるが、この作品では、自然に何らかの意味を読み取ったり、象徴へ変換したりすることなく、自然をありのままに語ろうとする姿勢が見て取れる。「場所の沈黙」を語ることは、環境詩学の究極の目的でもある。[11]行商人の語りはまた、聞き手の詩人を介して、読者に環境への姿勢を見直すよう促す。これは、「ナラティヴ・スカラーシップ」というエコクリティシズムの実践様式を連想させる。

第5章では、他者としての自然の表象と、ロマン主義的詩論との関わりについて考える。ハートマンが、碑文詩の自然詩への変容、ロマン派的抒情詩の主要形式の誕生を見る"The Ruined Cottage"や"Michael"（1800）等の代表的作品には、自然や場所を墓碑として詠う、すなわち自然を語ることを通して失われた対象を記録し、回復するという手法が用いられている。[12]また、作中人物の死は自然への帰還として表象され、自然も喪失の対象であることが示唆されている。この章では、"Essays upon Epitaphs"（1810）をとりあげ、Catherine Belseyの墓碑論を参照しながら、死、自然、そして（碑文）詩の関係について考察する。[13]

"Essays upon Epitaphs"は、*Lyrical Ballads*（1800）序文で展開されたロマン主義的詩論を、碑文詩を例に解説したものといわれている。このエッセイは、死や自然を（碑文）詩でいかに詠うかという問題を扱っている。ワーズワスは、墓碑や碑文詩を永遠性という概念の下に生と死を結びつけるものとしながらも、碑文詩は死を言葉で直接表すことができないとして、最終的には生と死の間の断絶を認めるという矛盾した姿勢を見せる。また、碑文詩は「真実」を語り、その言語は思想や事柄の「化身」であるべきだとも主張している。このエッセイの末尾に置かれた碑文詩では、自然が「絵のように沈黙した」存在として描かれる。これは、人間は死や自然から疎外された存在であり、それらの表象不可能性を認めることによってのみ、それらへの接近が可能となることを暗示している。詩作を通して、死や失われた自然へ近づきたいという欲望が、ロマン主義的詩論の根底にはある。

本論は、ワーズワスの自然観における自然の他者化に注目し、そのコンテクストと表象様式を検討した上で、最終的にロマン主義的詩論における重要性を論じる。これにより、詩人の汎神論的自然観と、現代の環境意識との連続性を確認する従来の読みは、自然という存在について考え、本質的な価値を見出す契機となる原初的体験を、図らずも読み落としていることが明らかになるだろう。また、自然の他者化の一因である喪失感や疎外感も、詩的源泉として見直されるべきである。ワーズワスの自然観の複雑さに注目することは、エコの捉え直しやエコクリティシズムの深化にもつながるのである。

注

1 Jonathan Bate, *Romantic Ecology: Wordsworth and the Environmental Tradition* (New York: Routledge, 1991).
2 Karl Kroeber, *Ecological Literary Criticism: Romantic Imagining and the Biology of Mind* (New York: Columbia UP, 1994) 37-52; Onno Oerlemans, *Romanticism and the Materiality of Nature* (Toronto: U of Toronto P, 2002).
3 Oerlemans 4.
4 Jonathan Bate, *The Song of the Earth* (Cambridge: Harvard UP, 2000).
5 Martin Heidegger, *Poetry, Language, Thought*, trans. Albert Hofstadter (New York: Harper, 1971).
6 Bate, *The Song of the Earth* 42.
7 Bate, *The Song of the Earth* 266.
8 Martin Heidegger, *Being and Time*, trans. John Macquarrie and Edward Robinson (New York: Harper, 1962); Robert Frodeman, *Geo-Logic: Breaking Ground between Philosophy and the Earth Sciences* (Albany: State U of New York P, 2003).
9 Martin Heidegger, *The Fundamental Concepts of Metaphysics: World, Finitude, Solitude*, trans. William McNeill and Nicholas Walker (Bloomington: Indiana UP, 1995).
10 Geoffrey H. Hartman, *Wordsworth's Poetry 1787-1814*, 1964 (Cambridge: Harvard UP, 1987) 116-40.
11 Bate, *The Song of the Earth* 151.
12 Geoffrey H. Hartman, *Beyond Formalism: Literary Essays 1958-1970* (New Haven: Yale UP, 1970) 221-24.
13 Catherine Belsey, *Culture and the Real: Theorizing Cultural Criticism* (London: Routledge, 2005) 64-80.

論文審査の結果の要旨

本論文はイギリス・ロマン派の代表的詩人William Wordsworthの自然観を、近年再評価されてきた中・後期のテクスト群（詩と散文）のなかに読み取り、それをエコクリティシズムという新しい批評理論の視座より分析しようとするものである。先行研究においては、現代の環境運動の一つであるディープ・エコロジーの思想に繋がる彼の自然観の汎神論的側面が強調されてきたが、本論文は、これまでややもすると一面的に捉えられてきたWordsworthの自然観を、物質性や他者性といった斬新な視点から問い直し、その複雑な自然観のうちにこそ、倫理的でエコロジカルな価値を新たに見出す契機が潜んでいることを手堅く論証している。

立論にあたっては、昨今のエコクリティシズムの多様化を視野に入れ、Wordsworth研究にエコロジーの視点をはじめて本格的に導入したJonathan Bateの*Romantic Ecology: Wordsworth and the Environmental Tradition*（1991）と*The Song of the Earth*（2000）を詳細に検証したうえで、その意義と限界を的確に指摘し、文学研究を通じて環境を思考の中心に据える努力を続けていく思索的実践としてエコクリティシズムを定義し直している。各章で扱われるテクストの読みを通じて提示されるこの研究姿勢は、Wordsworth文学を近代初頭の産物としてのみならず、現代のわれわれの環境意識にまで影響を与えうるものとして措定しようとするところに大きな特徴がある。人間がこれまで自然環境にどのように関わり、さらに今後どう関わっていくべきかを問い直し、Wordsworth文学に積極的に今日的意義と政治性を見出そうとする本研究の学際的なアプローチは、テクストが時代を超えて提起する問題意識に必ずしも十分に向き合ってこなかった従来のロマン派研究に新機軸をもたらすものとして高く評価できる。

各章の構成においても本論文は、そのように環境を基軸とする多角的な洞察を重要な思考の枠組みとして捉えようとする問題意識に首尾一貫して貫かれている。第2章ではナショナル・トラストや湖水地方国立公園設立の契機として位置付けられている湖水地方への旅行案内書*A Guide through the District of the Lakes*（1835）を取りあげ、当時一科学として大きく発展した地質学がWordsworthの環境意識に与えた影響について説得力に富む考察がなされている。Wordsworthの地質学受容をエコクリティシズムの観点から論じた研究書はこれまでになく、作家と特定の土地との口ーカルな関係だけではなく、地球環境、惑星思考といったより大きな視座を採り入れた本論文は、今後さらなる発展が見込めるWordsworth研究の一つの方向性を明確に打ち出している。

第3章は、白鹿をめぐる史実をもとに創作された*The White Doe of Rylstone; or The Fate of the Nortons*（1815）と、鹿狩りを題材にした"Hart-Leap Well"（1800）に見られるWordsworthの動物観について手際よく考察を進めている。これらの詩の分析を通じて、当時盛んであった動物愛護運動に見られる動物と人間との間に類似性を見る態度と、動物を下位で劣った他者と見る前近代的自然観を連想させる態度が入り混じった複雑な動物観が浮き彫りにされていく。このようなWordsworthの動物観を、エコクリティシズムの視点から論じた研究は皆無に等しく、本章は、時として動物を沈黙した他者として描くWordsworthの複雑な自然観の中に、ヒエラルキーに回収されない倫理の方向付けを見出そうとする。こうした独創性に富む見解は、自然を他者として語ることは可能なのか、「場所の沈黙」を語ることは可能なのかという問いかけとして、次章へと引き継がれていく。

第4章においては、Wordsworthの代表作の一つ"The Ruined Cottage"（1799）に焦点を絞り、沈黙した自然や自然の表出としての死の描写といった、他者としての自然の表象様式について明晰な分析がなされている。その際、初期エコクリティシズムが批判していた脱構築批評の"The Ruined Cottage"論に、人間精神の影響を受けない自然、記号化以前の自然の存在が示唆されている点を再評価し、エコクリティシズムの初期段階に顕著に見られた排他的側面を是正しようとする姿勢が認められる。共著『ロマンティック・エコロジーをめぐって』（2006）に所収された本章は、Wordsworthに、自然の物質性や他者性に迫るポスト・ロマン主義的態度を読み取っていくという点において、エコクリティシズムの可能性を新たに拓く批評実践として評価できる。

第5章は、Wordsworthの詩的言語論が展開されている"Essays upon Epitaphs"（1810）を扱い、死と同様に喪失の対象として扱われる自然が、*Lyrical Ballads*（1800）の序文におけるロマン主義的詩論の本質に関わることを論じている。Catherine Belseyの墓碑論を参照しつつ、自然の他者化の一因でもある喪失感や疎外感は、詩的源泉の一つとして見直されなければならないという考察が導き出される。人間が自然から疎外された存在であり、沈黙や死と結びついた自然の表象不可能性を認めることによってはじめて自然に接近が可能となるという主張は、Wordsworth批評に積極的に現代的意義を見出そうとする本論文の結論として首肯できるものである。

以上の議論を踏まえ、論文審査においては、審査委員から次のような指摘がなされた。「自然」の定義を予め厳密に行う必要があったのではないか、Jonathan Bateの先行研究に依拠している部分が少なからずあり、彼の論考との差異化をもっと大胆に追求すべきではなかったか、Heideggerの概念を援用した議論にはもう少し踏み込んだ独自の考察が必要である、エコクリティシズムがいかに脱構築批評を受容してきたかという論点への目配りが必ずしも十分ではない、章立てや注記の体裁に改善の余地があるといった点である。

しかしながら、これらの問題点は、本論文全体の価値を決して損なうものではない。Wordsworth研究の意義を根源的に問い直すのみならず、その新たな方向性を模索するものとして、本研究は関係学会において高い評価を得てきた。研究業績が示すように、本論文の一部が、審査付きの学会機関誌に既に掲載されており、日本英文学会、イギリス・ロマン派学会、ASLE-Japan/文学・環境学会の全国大会、及び海外の国際学会における数度の口頭発表においても高く評価されたことは何よりもその証左となろう。本論文は平明かつ明晰な英語で執筆されており、国際的なWordsworth研究に資するところが大きいと判断される。

上記考査に基づき、本審査委員会は全員一致で本論文が博士（言語文化学）の学位を授与するのにふさわしい論文であると判断した。